事務局 amateur スタッフによる **フォロー・アップ メモ・ランダム**

“青銅器の世界” にて

九州北部や山陰で灌漑水耕が浸透していた時期に、それを担っていたのは渡来人やその子孫であり、列島に居た縄文人の血は余り混じっていなかったのではないかと考えています。半島に居た彼らの親やそれ以前の世代の人たちは、彼らと同じような灌漑水耕をしながらも、狩猟・採集もしていたはずですし、列島の縄文人と共通する要素を持っていたのではないかと思います。弥生早期の生活様式の中の、縄文の伝統を引き継ぐ要素、例えば抜歯とか、翡翠の勾玉を大切にすることなどは、縄文人固有の文化だったのでしょうか。縄文晩期の列島の縄文人の特異性を、改めて調べてみたいと思います。

とは言え、縄文人の真空状態に近かった九州北部や山陰と違い、そこより東側には多くの縄文人がいたはずなので、集団の融合は進んだと思います。ただその状況は、縄文人が灌漑水耕などの渡来文化を受け入れたというよりは、西から進出してきた渡来系弥生人が、勝手に田んぼを切り開いたに過ぎないように思います。進出した当初は数的に劣勢だった渡来系集団も、米による優った繁殖力で増大します。また、河川上流に居た旧縄文系集落の人たちが三々五々と渡来系集団に加わり、遂には縄文系集団を吸収する形で弥生集落は成長したのではないでしょうか。しかしこの時代の弥生人は、祖先に大陸・半島系の血が多分に混ざっていたとしても、既に立派な列島人であり現代人の祖先であることには間違いありません。

半世紀近く昔に中学生だった友人も、レジメ25(p7上段左)の図とよく似た青銅器の出土分布を見た記憶があります。北部九州の銅矛文化圏に対して近畿・東海地方の銅鐸文化圏という構図でした。しかし、現在では、その構図は弥生時代後期の分布状況に過ぎず、それに先行して弥生中期前半から青銅器生産が始まり、最初期の銅鐸は山陰・瀬戸内・四国を含めた広い領域に分布し、中国地方では九州型と呼ばれる銅鐸も出土しており [レジメ23(p6下段左)]、また、中期後葉には武器形青銅器も銅鐸を大型に変化したものが、複雑な分布状況 [レジメ24(p6下段右)]であることが明らかにされているようです。

“弥生の祭場（復元イメージ）”

銅鐸は“集落のまつり”で使われたようです。初代金関塾長が監修した“ 弥生の祭場(復元イメージ) ”に描かれているように、木の枝から吊るされた銅鐸の周りを、秋の収穫を喜び神に感謝の踊りをしていたのでしょう。菱環鈕式から外縁鈕式、扁平鈕式と次第に大型化して“見る銅鐸”に変遷する銅鐸ですが、初期は“舌”を持った“聞く銅鐸”であり、その原型は大陸の“銅鈴”のようです。出土地の中心とされる畿内の発明ではなく、大陸から伝えられた青銅器が伝播の過程で独創的に変化したもののようです。他の青銅器と同様に、出土した銅鐸は暗い青緑色をしていますが、これは表面が錆びて塩基性炭酸銅になるためで、鋳造直後は金銅色に輝いていました。

“弥生の祭場”の銅鐸も、陽を浴びて燦々と輝いていたのでしょう。しかし金とは異なり、青銅器は時の経過とともに錆びて輝きを失ってしまいます。鋳造直後の輝きはどのくらいの間、保たれたのでしょう。毎日磨いていたら何世代も輝き続けるのでしょうか。この錆はレモン汁のような強い酸性で分解、除去されて、新しい表面を露出させることで、輝きを取り戻すことができます。弥生時代にも橘のような柑橘類が自生していた可能性があります。また、雲仙や湯布院などの火山性源泉も強い酸性なので、同じ効果が期待できますが、果たして彼らにその知識があったかは分かりません。

鋳つぶして再鋳造しても輝きを取り戻せますが、新しい銅鐸を入手できれば祭りは執り行なえます。古い銅鐸は高床式倉庫に保管し、やがて二代目や三代目も保管しているうちに時は流れて墓まつりの時代となり、銅鐸はその役割を失ないます。

今でも、「針供養」とか「櫛供養」と呼ばれる風習があり、「人形供養」とか「数珠供養」とかもあります。前者は、摩耗とか破損によって使えなくなった道具を、それまでの役割に感謝して行う供養です。後者は、自立とか永眠などで持ち主がいなくなり、その主を偲んで行う供養です。銅鐸も供養(感謝と礼節をもって大地の祖霊に返納)すべき祀りの道具ではないでしょうか。

“埋納”は、要らないものを捨てる＝廃棄ではありません。地霊を鎮めたり、集落の境界を守護するような役目を担わされた **手段** の側面もあったかも知れませんが、むしろ銅鐸自身を供養の **主体** とした行いだったのではないでしょうか。ただ、荒神谷や加茂岩倉の大量一括埋納は、もう一段の何かがあったように思いますが・・・

※ 古代史（弥生時代～飛鳥時代）に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論 大募集 （体裁は自由ですが、文書でお願いします）